

記念誌 「相中相高百年史」 ” 思い出の記 ” より

恩師の言葉今になほ

中 36 回卒 佐藤 正義 (※1)

人は出会いによって、大きな影響を受けることがある。

生来内向的で臆病者であった私は、中学時代何か自信が持てず将来に展望の開けない日目を鬱々と送っていた。そんな四年の時、当時真摯な生き方で相馬中学の卒業生に多大な影響を与え、名物教師として誰からも尊敬されていた鎌田昌次郎先生との出会いが、そしてあの時の先生の一言が、自分を覆っていた暗雲を吹き飛ばしてくれたという想いが昨日のことのように思い出される。

ある試験後の教室での講話の中で、「正義よく勉強した」と私のささやかな努力を評価し褒めて下さったことが何よりも嬉しく、成績は努力の後からついてくるものということ、その後もずっと実感し続ける契機となった一言であった。「やれば何事もできるという自信」を、感受性の強い少年期に得たことは何よりも幸せなことであった。その自信が信念になり、何事もやり抜かねばという執念にまで昇華した。これが自分の人生の支柱になっていることは疑いない。

青春時代は第二次大戦の真っ只中で、国のために奉仕するという純粋な気持ちで外地を転戦した。思い出したくない程想像に絶するような苦労や辛い日々だった。しかし国を想う一途な若い心が一つひとつの困難を乗り越えていったといえよう。タイでの戦争末期のこと、突如、空中から落下する機甲部隊を攻撃するための特攻隊の編成を命ぜられたことがあった。工兵隊故に手元にあるのは歩兵銃とスコープのみ、それで戦車に対することの無理は初めから分かっていた。そこでまず最初に、戦車を爆破する火薬の入手を考えた。その入手困難な火薬を敵の残した不発爆弾から、工夫に工夫を重ねて抜き取り、特攻兵器の爆雷や手榴弾などを作った。不発弾は危険を伴うものであったが、これとて人間が組み立てたのだから分解できない筈はないと考え、あらゆる方法を模索しやっとなら成功させたのである。部下の生命を思う時、攻めてくる戦車の前で野垂れ死にだけは避けたいと願う一心で諦めずに挑戦したことが効を奏したのであり、やればできるという信条をそのような戦争という生と死のぎりぎりの修羅場で体得したことが、その後の人生に決定的な影響を与えてしまったと思われる。

昭和二十二年に復員し成田に居を構えた。戦後の食糧不足の時勢でまず自分で生きる為にと、五段歩の山野を開墾し農業を始めた。土地は瘦地で収穫も少なく食糧に事欠くことも多く、畑だけの収入では生活を営むこともできず、何か生産物の加工によって生計をたてられないものかと考えた。薩摩芋の飴、芯太モヤシ作りなど試行錯誤を重ね、幾多の失敗にも挫けず工夫を重ねた結果何とか製品になり、それを事業化しようと考え仙台の図書館に足繁く通い研究を続けた。

私の生業となったモヤシ作りの当初は、小屋を建てる資材もなく、戦時中の工兵隊の経験を生かし、自力で横穴を掘りその中で始めた。このモヤシが業界で初めての無添加、無漂白でありながらあの茎太のベストモヤシになるとは予想だにできなかった。細くては駄目だ太くなければとの考えの末の発見だった。これも何事も頑張れば必ずできるという可能性を信じ、それに挑戦し続けた結果であった。「火事場の馬鹿力」という諺があるが、人間は潜在的に量り知れない力を持っているものであり、それを如何に発揮するかと模索し続けることが大切だと常に自分に言い聞かせている。現在の工場はオートメーション化し、監視室でコントロールすれば一応の製品はできるようになったが、最初の横穴は往時を偲ぶ縁としては勿論のこと、初心忘れずということで大切に保存し、常に細心の注意と情熱をモヤシ作りに注いでいる。

余談になるが、父が二宮尊徳先生の孫の尊親先生と親交があり、今も尊親先生の書を家宝として大切に保存している。そんなこともあつてか幼少の頃より知らず知らずの内に二宮先生の教えが身についたようにも思える。「至誠を本とし、勤労を主とし、分度を体として、推譲を用となす」というあの報徳訓の意味するところを熟慮し、少しでも実践に移すよう心掛けて今日この頃である。

(※1) 昭和 13 (1938) 年卒 中村出身

(転記 村山)